
山古志から能登半島地震による被災地のみなさまへ

このたびの能登半島地震で被災された方へ心からお見舞い申し上げます。

山古志も、2004（平成16）年の新潟県中越大震災（中越地震）で甚大な被害が発生し、余儀なく全村避難しました。

中越地震について山古志住民が証言として残したものを山古志から能登半島の集落のみなさまへのメッセージとして取りまとめてみました。

みなさまの気持ちにつながるものがあれば幸いです。

避難所の、境のないくらしで感じたのは、みんな一緒だから頑張れるということ。

避難所では一人暮らしだったため他の家族の間に入り、一緒に生活することとなった。そこで感じたのは、自分だけではない、仲間がいるという思いだった。

－（女性・当時 50 代）

当時は学校給食の栄養管理士。震災後は山古志に戻り、近隣の気の合う仲間（住民）とともに農家レストランを始めました。



避難所でやっと同級生に会えた喜びは、言葉に言い尽くせない。きっと一生忘れないだろう。

自宅で倒れてきた食器棚のガラスで負傷、身動きできなくなっていたところを祖父に助けられ、家族と共に避難した。偶然だが、この年9月14日に小さな地震が2回あり、「大きな地震がくるかもしれない」と日記に記していた。

－（女性・当時 10 代）

当時、山古志中学校 3 年生だった彼女が作文集に記した言葉です。彼女は現在、
歯科衛生士をしています。学校は転校でなく間借りだったため、先生もクラスメ
イトも変わらず安心して過ごせました。



錦鯉を避難させたが、放す池がないんだ。養鯉^{ようり}を再開するまでに、2 年間もかかっ
た。

同業者の協力により被災した錦鯉を救出したが、池が破壊されて戻すことができ
ない。先が見えないなか、池の修復から始め、2 年間は養殖ができないという苦闘
の末、養鯉を再開した。

－（男性・当時 40 代）

山古志村には、錦鯉^{にしきごい}の発祥地として錦鯉の養殖が盛んな集落があります。全村避
難により錦鯉だけでなく牛など多くの家畜は集落のいたるところに取り残された
ままでした。中には、停電による酸欠や、地震の揺れによるショックが原因で犠
牲となったものもあります。



川が塞がって木籠^{こごも}が沈むと聞いた時は、ホラ話ではないかと思った。

道路が各所で崩落、電話は通信が全て途絶したため集落が孤立しただけでなく、小さな集団で避難した住民同士も互いの情報を交換できなかった。身の回りの情景しか見聞きしていない住民には、河道閉塞^{かどうへいそく}など想像が出来なかった。

－（男性・当時 50 代）

地震による土砂災害で河道閉塞が生じ（河川がせき止められ）、水没した木籠集落の住民。この地すべりを実際に見た住民は、「山が動いた」と表現しました。それを聞いた村長も、実際の光景^{こうけい}を見るまでは、状況をすぐに想像できなかったといいます。

いくつかの集落は、河道閉塞によって上流からの水と崩れた土砂が溜まり、徐々に家屋が水没していきました。また、せき止められた水と土砂が決壊し、土石流となって流れ出せば、下流にさらに大きな被害をもたらす危険が出てきます。このため、国の直轄工事として、ポンプによる排水作業が進められました。



子どもたちは元気で、大人よりも山に帰りたいたいという気持ちも強かった。

ヘリコプターで大変な被害を見ても希望を捨てない子どもたちに長島村長は励まされた。避難所や仮設住宅で環境が変わっても、楽しみを見つけいきいきと過ごす姿に大人たちは元気をもらった。子どもたちの「山古志へ帰る」の言葉に後押しされ大人たちは帰村を決めた。

－（男性・当時 50 代）

地震発生当時の山古志村教育長。子どもたちは、被害の状況についてほとんど知らされず、元気がなかったそうです。そこで当時の山古志村長は、若い世代にふるさとの様子を焼き付けてほしいとの思いからヘリコプターから山古志を見せることにしました。上空から甚大な被害を確認した子どもたちは、泣きはらした眼で避難所へ戻りました。それでも希望は捨てず、子どもたちの「山古志に帰りたいたい」という思いが、むしろ大人を励ますほどでした。



**全村避難、それは「やまこし再生」に向けた始まりだった。
—長島忠美**

当時の山古志村長 2017年8月死去

**私はよそじゃ暮らせない。ここで生まれて山古志の土になる。
—酒井省吾**
前山古志村長



取りまとめ：やまこし復興交流館 おらたる
2013年度行った聞き取り及び、作文集「38人がみた新潟県中越地震」を元に再編集しました。